

# 日大数学科事件とその結末

福 富 節 男

私は 92 歳、正確に言うとあと 2 日で 92 歳です。話を始めるにあたって二つのことを怖れています。一つは表題のことが数学史の話になるだろうかということ、二つめは年齢のせいで老人にありがちな誤り、記憶の不確かさに陥らないかということです。用心しながら話そうと思っています。しかし漫談にすぎないことになるかもしれません。実は結末こそお伝え申し上げたいのですが、それだけでは芸のない話で、事件そのものこそ重要な点を含んでいると思うので、まずどういう事件であったかをお話いたします。(2011 年 11 月 29 日)

1962 年 11 月 14 日、日大文理学部数学科教員の福富節男、木下素夫の両助教授、銀林浩、倉田令二郎の両専任講師の計 4 人は秋葉安太郎文理学部長からの自筆葉書でよびだされた。用件は全くわからぬまま学部長室へゆくと、学部長は**君たちはこの大学の思想にあわない、事ここに至った以上やめてもらう**。辞表を 3 月 31 日までに出せと宣言した。泉信一教室主任教授、その年主任を解任された佐藤良一郎教授が同席していた。どういう理由かと問うても学部長からの返答はない。木下が「安保のデモにいったことか」というと、「そうではない」といった。倉田が「じゃ何が理由か」といい、返答がないことに「失敬ではないか」と続けると、学部長は「**また、それぞれ**」といった。話のつづけようもなく、部屋にもどって、倉田は「初めて会ったのに、**またそれぞれだ**」と笑った。ここで「**また**」と強調したのは、上記の大学側が「**事ここに至る**」という表現をすることに繋がるのが暗示されていると思うからだ。ついで翌年 3 月、図書管理などを担っていた助手の佐藤恒子が突然解雇を言い渡された。全く理由が成り立たず、突然「助手は 1 年ごとの任期だ」という言い逃れをするばかりだった。何か不都合なことがあるのかと問うても、「それはない」と答え、「助手の任期は 1 年」と急ごしらえの言い逃れが見え見えの返答が返ってくるばかりである。

さて事ここに至ってはというのは、まともに考えるとどうにもわからない。前年大学が突然言い出した学科増設案を数学科は教室会議で話し合った末拒否したことにあるのかもしれない。学科増設案とは、この年つまり1962年4月に知らされたのだが、既設の数学、物理、地理の理系3学科のそれぞれに「応用」の名を被せた応用数学科などの3学科を急遽増設し、5月募集開始、7月入試、8月講義開始、9月から4月入学の学生と一緒にして講義を行うというのであった。私たち数学教室はこのような、学生増員だけが見え見えのやり口を認めることはできないし、そのための教員の増員がゼロなど問題にならない。講義も教育も不可能であるとして増設拒否を決めた。佐藤良一郎主任は、私たちの意向を当然として、この結論を学部長、事務長伝えて、それを呑ませた。このようなことは、従来の日大では起こりえぬことであつたろう。学科の増加、廃止乃至は統合といったことは、企業体あるいは営業体としての日大の当局は末端の学科あるいは教室が云々すべきことではなかったのだろう。教育・研究は末端にすぎない？

学部長は私を呼んで「君たちはやたらに難しいことを教えているというではないか」という。これは私たちがどのような講義・教育をしていたかに関する事だから後にする。後になって気づいたのだが、私たちについて当局に報告される仕組みが在来の職員などを使って出来ていたのではないかと思った。ともかくいろいろな風評が立ったこと、数学科の学生が中退あるいは転科していくことも、営業としては日大の最重要な問題で、「事ここに至る」のうちに入っていたのかもしれない。そのような学生についても、相談を受ける限りは丁寧に対応したつもりである。

日大文理学部で知ったのは、事務長が非常に大きい権力、支配力をもっていることであつた。私企業である以上経営上のある種の大きな権限をもつのはありうることだとしても、それが微細な点にまで至っている。些末なことで読者の方には恐縮だが、学会に行く旅

費を貰うのに事務長の原田氏のところへ行って事情を話し、旅費を頂きたいと述べると、引き出しから金をだして呉れた。なんだか馬鹿馬鹿しくなって、以後私は数学教室用に独自の書式の書面をつかって事務室に出すようにした。事件が起きてからから考えると、こんなことは原田事務長にとっては従来はなかったことで、数学教室を不快なものに思ったかもしれない。日大は世に経営第一主義と言われていたが、末端ではどんな現象を呈していたかを示したのである。

さてこの事件の一番の問題点は、思想を理由にしての誡首である。一度に4名というのは大学で起きたこととしては多数であったことである。大学側は思想を理由にしたのであり、それを「家風にあわぬ」などと緩和して紹介した人もいるが、そういう緩和した表現は起きたことを歪めるものである。日大文理学部長が「思想がこの大学に合わぬ」といったことを明確にしておきたい。

「ここでは難しいことをやってはだめですよ」と日大の古くからの数学の O 先生がしばしば言うのを聞き、奇異にも思い、折角数学という学科に来た学生にきた学生に対して失礼ではないかという気がした。優秀で鳴る大学ではないが、優秀なものから力の劣るものさまざまというのは、程度の差はあっても、どの大学にも同じである。この大学で私が見たのは受験社会の優等生ではなかったり、受験社会と無縁な高校出身者であったりであったりである。国語や社会という科目の試験と思うと入学試験場への足が鈍ったという学生もいた。彼は数学を学びたいと思っていたら、私大では数少ない「数学科」が日大文理学部に創設されたという記事を見て、この数学科にきたと言う。彼は4年生のとき、木下君の指導で、Chevalley の *The Theory of Lie Groups* を読み通した。またある学生は就職先で、沢山の境界条件のもとでの偏微分方程式を処理しなければならなくなり、出来ませんといったら上司から「それは学生の答えだ」といわれ、自分で何とかしようと思つたとき、さまざまな本を探し道を求めて何

とかした。そんな話をしに来た。ともかく数学を学びたいという気持ちがあるのだ。

「難しいことをやっている」と言う当局やその側の先生に対しての答えを書くべきところへ来た。大学の数学科として入門的に通常やるような科目をこうぎするのだが、たとえば木下は代数学の入門をやり、ガロア理論も平易に丁寧に講義した。私は2年生には線形代数を講義したが、当時は現在のような教科書はなかった。浅野啓三の『線形代数学提要』という薄い本があったぐらいで、佐武一郎の『行列と行列式』がまだ見られぬ頃、同書が『線形代数学』の表題になるのはずっと後のこと。演習問題を集めたり、工夫したり実に多量の問題のプリントを作って配布した。現在の標準的教科書とされる齋藤正彦の名著『線型代数入門』が出たのはさらに後である。演習の時間の直前の昼休みに、学生たちは黒板一杯に解答を書いた。試験などは午後一杯で足りなくなり、途中皆で外に夕食を食べに行ったりして、夜8時、9時まで一人一人が何枚もの解答を書いた。そういう状況では、監督なしでもカンニングなど起こらない。解答の文章の書きぶりがそれぞれの個性をもってくるといっても大袈裟ではない。

前述の○氏は私たちがこの事件で去ったあと 学生たちに「ここは私が作ったので、しばらく若い人たちに預けていたのですが、これからは私が皆さんに教えます。」と語って、学生の失笑を買ったという。古くから日大の一般教育を担当していた人たちのことにも触れるべきだろう。

この日大数学科創立の中心だったのは辻正次先生であった。東大名誉教授、東大数学教室定年後、日大理工学部数学教室に自分の研究室をもっておられた。理工学部の数学科ができるのは、文理学部の数学科創設より1年後になる。辻先生は細かなことには関わらない性分で、「初めての学科で、何も決まってないのだから、貴方の好きなようにやればいいですよ」としかいわなかった。これはミス

リードと言え、そうも言えるのだろう。しかし私もかなり迂闊だった。

木下は 1960 年つまり私より 2 年後にここに来た。古くからの人たちに配慮すべきだと心得ていた。具体的に細かくは書き難いことだが、そういう配慮にも限度というものがあり、それは数学というものに対する考え、大袈裟言葉なら数学観において、私たちと大きな隔たりがあつて、それは埋めるすべのないものであつたといえるだろう。木下、銀林、倉田それに後から日大に加わつた宮崎浩と私は互いに旧知（かつての S S S : 新数学人集団の仲間）であり、それはいわば調子が良すぎたといえよう。

大学側の言い分を認めることができないのは当然だが、ここで日大側と争つても、われわれにとってなにも得るものはないし、日大を改革の道に乗せることなどできることではない。私たちの方針は研究の道を閉ざさないということで、知将（銀林の言葉）木下がリードした方針で、転身の道をとることにした。それが成つたころ、野崎昭弘の提案に上野正、齋藤正彦が加わり 3 人が肝煎りになって五十人の呼びかけ人をそろえ、日大文理学部批判の声明を發した。日大文理学部が 4 人の数学者に退職を強要した行為を反省し、教育と研究に従事する者への敬意を払うことを公にせぬ限り、日大文理学部への協力を拒むというものであつた。其れは三ヶ月で約千人の賛同署名を得たがその頃は日本数学会の会員が約三千人だから、かなり多数の賛同者であつた。

学生たちは劣悪になつた教育状況にお加え、大学側への批判の広がりやを怖れる大学当局の極端な学生管理のもとに置かれることになつた。学生たちは学外に自主講座をひらいた。そこには東大、立教大その他の教授たちが講師となつて協力した。私たちも講師として、この自主講座に参加した。学内では講師となる力量の上級生が講師となつた。しかし教室を確保するにも大学事務側のからの妨害に悩んだ。この自主講座は後の大学闘争の時期に自治大学といわれたも

のの走りといっってよいだろう。講座は約2年間つづいた。

事件は多くのジャーナリズムが、大学に関する報道として取り上げた。日本学術会議の学問・思想の自由委員会が私たちをはじめ、声明の発起人、学生を呼んで報告を求め、日大文理学部当局からも事情を聴取した。

福富が物理教室に預けておいた私物を取りにいったときのことである。下高井戸駅そばの喫茶店に休憩しているところに、文理学部の事務職員がきて、暴力的に私を引きずり出し、「くさい飯食ったものもいる」などと脅しをかけ、待たせた車で拉致しようとした。一方通行出口付近で彼らは下校中の学生とトラブルになり、その隙に彼らの手をのがれた。私の抗議の手紙には謝罪せざるを得なかった秋葉文理学部長の手紙がいまも手元にある。倉田は都内の大学に行き先が決まっていたが、中傷が入って取り消しになった。激怒した倉田はクモ膜下出血を発症して、半身不随になった。言語と数学能力の部位に障害が起こらなかったのは幸いで、のちに九大の応用理学教室に位置をえた。福富は東京農工大学、銀林は明治大学に、木下は早大理工に移った。退職強要外の佐藤教授、宮崎 浩講師は一年間不快をこらえていたのち、自ら退職し、それぞれ明星大、慶大に位置を得た。

**日大側の謝罪** 日大文理学部数学科創立五十周年の式典が2008年に行われた。その際の文理学部長島方洸一教授の式典の挨拶の辞は「四十数年まえ当時の先生方に大学が辞職を強要するということがあったが、まことに不当なことで、関係者の皆さんにお詫び申し上げます。」というもので、式辞はそれだけで五十周年を祝すなど儀式にありがちの飾り言葉はなかった。島方学部長が学生のころ、この事件を知ったが、当時何もしなかったという悔恨を今日まで持ち続けていた、ということを知り、私は感動した。己の身にふりかかったことではない事件を己の中に持ち続けておられたことに驚きをもった。日大の学部長が謝罪したことは日大当局が公

式に謝罪したことだから、従来の日大からは想像もできないおとである。島方教授は相当の苦慮と決意のもとで謝罪の辞を述べたと他の人から聞いた。島方教授は、機を待ってこの言葉を吐くことができ、「数十年のつかえ」が下りた気がすると後に語った由である。

さて現在の数学教室について言えば、釜江慶子に始まって、森真ら多くの数学者の手によって再建されたようである。再建の事情と状況は現在の教授陣の方々が語るべきことであろう。当時の学生も被害者だと言ったが、厳しく不当な管理、貧弱な教育のもとにおかれたことをいうのである。自主講座（自治大学）などで、われわれとの関係・交渉を少しだけ記したが、この事件に関しての学生側の解釈、さまざまな要求など万般のことは当時の学生自らが語るべきことで、私が変わって語ることはできない。

前述の抗議声明の署名活動が日本の数学界にもたらしたことも少なくない。その運動が終わったとき、これをそのままに終わらせないで、平和を守る数学者の会といったものを作ってはとの発言もあったが、それは即座に否決された。そういうものがあると、そこに依拠しようとする気持ちができ、それが却って障害になる、その時その時にやればよいということだ。事実 S. スメイルがベトナム戦争に反対の運動を始めたとき、たまたま来日中の L. シュワルツからそのことを聞き、年会開催中に、スメイルへの連帯の意を打電し、われわれの実践であるベトナム戦争反対運動が始まった。それはベトナム問題に関する数学者懇談会（略称ベトナム数コン）と称せられ、ベトナム戦争中継続的に行われ、日本の科学の領域で他に見られぬ活発な活動がおこなわれ、仏、米の数学者との連携をも生み出した。